

二つの校舎のこと

九段中等教育学校講師 内山與治

1 富士見校舎のこと

中高一貫校への移行にあたり、富士見校舎は新築された。今は主として後期課程（5、6年）用に使われているが、当初は前期課程（1～3学年）用だった。そのころは富士見小学校を複合施設に改める、富士見みらい館建設工事で北側の眺望がひらけていたので、校舎が坂の上ちかくにあることが実感できた。富士見校舎の地所は長く国有地だったようで、古地図によれば明治のころは裁判所の出張所であったり、裁判官の研修所であったりした。

本校の位置する江戸城外郭（外堀と内堀の間）の北西側は、多くは旗本屋敷だった。牛込見附（飯田橋駅西）から坂（早稲田通り）をのぼりきったこのあたりには、火の見櫓が立っていたはずだ。ここは長く幕府直轄の定火消屋敷だったのだ。九段校舎の“レインボ



一、の円柱あたりを南縁とし、富士見校舎、富士見小学校、日本歯科大の一部まで含む広大な敷地で、大身の旗本が職住一所でその役にあてられた。火の見櫓からは広く見渡すことができたであろう。

ついでながら、靖国神社境内の大村益次郎像は上野の戦況を見ているポーズだそうだが、当時なら方角的にも地形的にもそれは可能だったろう。が、現在では不可能だ。ある学校の体育館棟がまずさえぎっている。

古地図を見ると、この屋敷の東側（早稲田通り）と南側（白百合方面）の道はとりわけ広くとってある。出勤しやすくしたのだろうか。

富士見校舎西側（理科大側）の道は、飯田橋方向にくだっていくと、こども園のところで左に曲がり、すぐ右に折れるクランク状になっている。これは古地図とぴったり重なる古い道筋のままだ。他の城にもみられる、防壁上直線にしない「鍵の手」（「かねんて」とも）の道にしたのだろうか。ここはとくに傾斜がつよいので、“のり”を長くにとって角度をゆるめ、火消しの動きをよくしたのだろうか。

巨大城郭江戸の防火上の弱点はとくに北西にあり、多くの大火が北西の風による延焼だった。そのため、火除地を多く北西側にとっていた。靖国神社境内、インド大使館から千鳥ヶ淵戦没者墓苑にかけてなどは何も建てない明地（空き地）だったようだ。

早稲田通り富士見小の校庭部分の石垣は、定火消屋敷当時のものが残っているのかもしれない。

2 九段校舎のこと



国王であった人の住まいのあとに建つ学校は、ほかにあるだろうか。

琉球王朝最後の19代尚泰王（1843～1901）はその20年余りの後半生を、王としてではなく、明治日本の定めた華族としてこの地で過ごした。

明治政府が尚泰王に上京を促していたころ、ここは宮内省御用邸用地となっていた。

明治6年（1873）皇居の西の丸御殿が消失し、その後しばらく赤坂が仮御所だったころだ。皇族方の御用邸を確保するため、宮内省が取得したそのひとつがこの地ということか。いまま靖国側に残る石垣は富士見小のそれよりも上等に見えるのは気のせいかな。しかし、ここは皇族の邸にはならなかった。

尚泰王の前にここに住んだのは木戸孝允（旧称：桂小五郎1833～1877）である。駒込に別邸もあったが、亡くなるまでの4年間ほど、こちらが本邸だった。（国立公文書館所蔵『明治東京全図』（明9＝1876）で確認できる。）御用邸用地に邸をかまえたのは、参議を退き、宮内省出仕となったことと関係があるのかもしれない。

木戸孝允は南に接する火除地（弓馬の練習場でもあった）とその西の武家屋敷跡地に、長州藩由来の招魂社（のちの靖国神社）を建てることを大村益次郎（1824～1869）にもちかけられ、明治天皇に上奏したという。

ここは「元国王が暮らした場所」となる前に「維新三傑のひとりの暮らした場所」でもあったのだ。このような学校は、ほかにアルワケナイ。

明治政府による“琉球処分”のゴールとしての尚泰王の上京は1879年、この邸を与えられ、のち侯爵、貴族院議員に叙せられたというが、議会への出席はなかった。一度だけ許されて帰琉したほかは、外出の機会は極めて少なかったという（東恩納寛惇『尚泰侯実録』）。

永井荷風（1879～1959）が一番町で暮らしていた十代のころの記憶を随筆『桑中喜語』の中で「招魂社の馬場の彼方に琉球屋敷あり。筒袖の着物に帯を前で結び、男も長き簪に髪を結ひたる琉球人の日傘手にして逍遥せしさま云々」と書いている。隔絶した空間に見えたことだろう。

1901年、侯爵家を継いだ20代尚典氏（1864～1920）のころの地図には、広い敷地の東側に公的な、西側に私的な建物がかたどられている。いま九段校舎の東隣に建っている洋館（旧山口萬吉邸）はまだなく、そこは郵便局となっていた。

1920年、21代尚昌氏（1888～1923）も侯爵として邸を引き継ぐが、わずか3年後に亡くなってしまう。それが1923年6月。その9月1日に大地震が起きた。

昼食どきに起きた地震による大火は、東京の東半分を焼き尽くし、ちょうど定火消のあった所

の北側、今の住友不動産千代田富士見ビルのあたりまで迫った。靖国神社遊就館は大破し、灯籠は数多く倒壊し、まもなく境内には仮設テントが、本校体育館棟に接する道路までぎっしりと建ちならんだ。

尚氏邸の具体的な被災の程度はわからないが、当主を失って3か月もたたない時のことだ。22代となる尚裕氏（1918～1997）はまだ5歳。尚泰王上京から四十余年で尚家はこの邸を離れ、渋谷町中渋谷（現在の南平台町）に移ることになった。

その5年後のことだ。麴町の仮校舎で開校（1924）していた第一東京市立中学の本校舎がこの地に建った。当時の写真を見ると、東側と北側の二辺にブーメランのような角度で広がりさらに西側にもつづく巨大な校舎は、震災からの復興の象徴のように見える。なお、山口萬吉邸はその前年に建ったそうさ。さすが「東京タワーの内藤多仲氏」設計の頑丈さだ。

二つの校舎の建つ所にあえて意味を持つなら、かつて災害を防ぐはたらきをしてきた所と、わざわざ立ち直った所、と言えるだろうか。

時代が違うと言ってしまうえばそれまでで、「地縁のつながり」とも「他生の縁」とも言えないかもしれないが、九段の地ですごした尚泰王が最後のあるじであった、あの美しい城の早い復元を願う。

（2020年1月）